

50年の歩み

昭和38年度～昭和47年度『教育基礎づくりの時代』

PTAの誕生 戦後間もなく、文部省がCIEと協力してPTAの結成を呼びかけ、特に岐阜県の軍政部は強く奨励した。東海北陸軍政部はPTAの性格を明確にするため、民主団体指導者講習会の名で伝達講習会を行った。それを受けて県教育委員会も、参考会則を紹介するなど、趣旨徹底に努めた。稲葉郡においては、昭和23年に小学校8団体、小学校6団体の「育友会」あるいは「PTA」が結成された。

当時は、戦後の混乱期で学校配当予算も少なく、学校運営にも事欠くありさまであったため、苦しい生活の中から、我が子の幸せを願って、労働奉仕や資金援助（PTA総予算の5～6割、廃品回収収益）をし、学校備品購入や児童・生徒の活動費にあてるなど、学校後援会的色彩が強く、本来のPTA活動は余り見られなかった。昭和30年代後半より徐々にではあるが、PTA専門委員会活動費の増額などがなされ、予算面からも後援会PTAから活動するPTAに大きく転換し始めた。

衣替えしたPTA 昭和38年、県PTA連合会評議員会において、40年岐阜国体の年を目指して「伸びゆく県民運動」の推進を決議し、同年県P連大会において「人づくりの基礎は家庭教育の振興にある」と宣言した。その宣言を基に単位PTAにおいても、家庭教育・成人教育活動を重視し、重点活動

（「各務原市教育30年史」より）
に取り入れ、講演会を開くなど、家庭教育への関心を図りながら、学ぶPTAとして第一歩を踏み出した。

昭和41年に開かれたPTA役員研修会では「PTAはどうあるべきか」をテーマに、社会環境浄化・家庭教育と学校教育など、時代を背景とした問題が多く提案され、家庭のあり方が課題となった。

昭和42年、市教育委員会から「PTAのあり方」として、家庭教育学級の運営・青少年の健全育成・子ども会育成の協力要請があった。

活発に動き出したPTA 昭和43・44年にわたり市P連では、過去の学校後援会的性格からの完全脱皮を共通課題として検討し、連合会としての活動の中心的役割を果たし得るように組織を再編成した。その時の重点を成人教育活動費の増額、自主家庭教育学級をはじめ、各種サークルの発足、単位PTA広報の発刊などに置き、単位PTAへの浸透を図った。このことにより、家庭教育学級（市主催）修了者や、PTA会員を対象とした自主家庭教育学級が誕生し、家庭教育問題、親子読書など幅広い学習内容が取り上げられるなど、自主的運営が行われた。また一方では、読書・音楽サークルの誕生や単位PTAによるPTA広報が発刊されるなど、次第に各単位PTAに広がりを見せ、文化活動がすすめられた。

昭和48年度～昭和57年度『教育施設充実・整備の時代』

親自らが学び行動するPTA活動 市PTA連合組織は、昭和39年に誕生した。40年代では、初期の学校後援的な性格から脱皮し、社会教育団体として学校教育や家庭

（「各務原市教育30年史」より）
教育への理解と振興、校外の生活指導・教育環境の改善についての活動を進めてきた。活動の合言葉は「学習するPTAから子どもを育てるPTA」であった。

昭和50年に入り、青少年の非行が問題になってくると、積極的に実践行動するPTAへと自覚を高め、非行を誘発する社会環境の浄化活動が盛んに行われるようになった。

インベーダーゲームの全面禁止・モーター建設の反対運動などが全市的に進められた。

昭和55年からは「親自ら変わる時、子は育つ」を合言葉に、行動するPTAをめざしての活動が活発に展開された。特に父親の出席を訴えての学級や地区懇談会の推進、校外指導の充実が図られた。

昭和58年度～平成 4年度『教育活動充実・発展の時代』

健全育成に努めるPTA 心豊かで、たくましい子どもの育成が親と教師の共通の願いである。このことは、当然、PTA活動の中心的活動でもあり、学校と家庭の連携が必要とされる場所である。ところが、中学生の問題行動をはじめとして、女子非行が多発し、青少年非行が増加するようになり、その上低年齢化傾向が目立つようになった。その原因の一つに家庭があることが指摘されるようになった。例えば、家庭におけるしつけ不足、親の甘やかし、ふれ合いの欠如等が挙げられた。こうした現状を踏まえて、親は何をすべきか、また、PTA活動はいかにあるべきなのかということが切実な課題となってきた。

市PTA連合会（市P連）では、児童・生徒の健全育成を願い「親自らが変わる時、子は育つ」のスローガンのもとに～あいさつと対話のある家庭づくりに努めよう～をサブテーマとして、地域ぐるみの活動ができるPTAをめざして取り組んできた。

地域に根ざす市P連の活動 毎年、市P連では、定期大会と研究大会を開催し、単位PTA（単P）の活動を活性化するための活動内容を交流したり、講演により活動に刺激を与えたりする等の工夫がなされてきた。講演内容も、中学生の心理を学習するものや、市民会議の活動の重要性に触れる内容のものが中心となった。また、研究大会においては、「あいさつ」を中心として、子どもの道徳性・

（「各務原市教育30年史」より）

生活意識を調査して交流するなど、地域に根ざした活動の交流がなされるようになった。

子どもも参加するPTA活動 単Pの委員会も、市P連の動きを受けた活動をするなど活発化してきた。あいさつ、明るい会話のある家庭づくり等が委員会活動として広く取りあげられ、登校時に生徒会のあいさつ運動にPTAが加わったり、市民清掃等地域への児童・生徒の参加、地域でのボランティア活動の促進を図ったりするなどの動きが重要視されるようになった。さらに、中学校では、親睦の集い（授業参観・スポーツ大会）を計画し、親（両親対象）、生徒・教師が参加し、各学年が学級対抗でフットベースボールや綱引きを行い、相互理解を図ってきた。また、小学校ではふれあい広場（親子・教師が一緒になり、学年で大縄跳び・ドッジボール等を行う）を学年・学級委員会で計画実践するなどの工夫がなされた。このような取り組みの中で、本市においては少年非行も沈静化の方向に向かった。

この十年の歩みの中で、当初叫ばれていた父親のPTA活動の参加が再びみられるようになった。それは、少年問題が落ち着きを見せる中で、新たに月1回の学校週5日制が実施され、子どもの学校外活動を援助するような、新たなPTA活動や援助のあり方が父親に求められるようになったからである。